慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	<戦死者報道>としての『趣味の遺伝』
Sub Title	Syumi-no-iden as the report of dead of war
Author	倉口, 徳光(Kuraguchi, Tokumitsu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2009
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.96, (2009. 6) ,p.24- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00960001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈戦死者報道〉としての『趣味の遺伝』

倉口　徳光

一

夏目漱石『趣味の遺伝』は、漱石の戦争観、国家観などを考える上で、重要なテクストとして従来から何度も論及され、引用されてきた。その端緒となったのは、『趣味の遺伝』に漱石の厭戦思想を読み取った駒尺喜美の論文であろう。[1] この駒尺論をきっかけに『趣味の遺伝』は、漱石の厭戦思想や戦争批判をめぐる問題に援用され続けてきた。しかし、この駒尺論が、その数年前に『展望』誌上において丸谷才一との間でなされた『こゝろ』解釈を下敷きとしていることや、[2]「余」（と漱石）の姿に安易に大岡昇平の姿を重ね合わせた解釈の歴史性には注意が必要である。[3] ましてや、ポストコロニアリズムの登場以降、〈漱石神話〉ともいえる解釈に対する〈正典〉批判は、佐藤泉の言葉を借りれば、「屋上に屋を架して」いる程になされてきたのである。[4]

こうした研究場を踏まえた上で、本稿では戦争批判の有無や強度を問うことよりも、「余」の特異な語りに焦点を合わ

せ、日露戦争を時代背景として「余」がなぜこの物語を語り始めたのかを論点として、この『趣味の遺伝』が持ちえる批判性や効力を考察したい。

この点に関しては先駆として、日露戦争下における「文学」「物語」に対して、「学者（学問）」の優位性を示そうとする「余」を見出す宮薗論[5]などがあり、近年では神田祥子が、「余」の語りの軽薄さや、論理の破綻から、「余」が好奇心のために、学問をひけらかす軽薄な学者であると規定し、そうした「余」を造形することで日露戦争下において、自らの立場を自己弁護的に見出そうとする「文士」を戯画的に描き出していると論じている[6]。

二

まず「余」の語りがなぜ問題化されるべきかを示しておく必要がある。この一篇の執筆動機は、ひとまず「余」自身の言葉によると、「元来が寂光院事件の説明が此篇の骨子」や「学問上から考へて相当の説明がつくと云ふ道行きが読者の心に合点出来れば此篇の主意は済んだ」と語るように、〈趣味の遺伝〉の論理解明であることが分かる。それは「余は此時浩さんの事も、御母さんの事も考へて居なかつた。只あの不思議な女の素性と浩さんとの関係が知りたいので頭の中は一杯になつて居る」や「「気の毒ですな」と云つたが自分の見込が着々中るので実に愉快で堪らん。是で見ると朋友の死ぬ様な兇事でも、自分の予言が的中するのは嬉しいかも知れない」などと言う言葉が、「余」の口から語られることからも窺うことができる。また、それと同時に「余は文士ではない。西片町に住む学者である」や「余は前にも断った通り文士ではない。文士なら是からが大いに腕前を見せる所だが、世は学問読書を専一にする身分だから、こんな小説めいた事を長々しくかいて居る暇がない」などと自分が「文士」ではなく、「学者」であることを「余」は殊更に強調す

る。とすれば、この一篇は「余」という「学者」による〈趣味の遺伝〉論理の解明（の発表）を趣意とするものであることが分かる。

しかし、この「余」が語る一篇の物語を見たとき、それが「余」が自己規定するような物語通りに語られていないことに気づかされる。そもそも「文士」でないことを断り続けることは、この一篇が「文士」的になっていることを皮肉にも表しており、また「余」は自らも認めるように「小説めいた事を長々しくかいて」しまっているのである。同様に末尾において、「今迄の筆法でこれから先を描写すると又五六十枚もかかねばならん」や「漸くの事こゝ迄筆が運んで来て、もういゝと安心したら、急にがっかりして書き続ける元気がなくなった」と語る。「漸くの事こゝ迄筆が進んで来て」とあるように、「今迄の筆法」がなかなか「此篇の骨子」に辿り着かなかったことを告白している。

そして、「実は書き出す時は、あまりの嬉しさに勢い込んで出来る丈精密に叙述して来たが」という言葉から、「余」が「読者」に向かって語り（あるいは書き）始めたのが、全ての謎を解き明かした後であることがわかる。だとすると、「学者」である「余」は、「読者」に向けて語り始める（書き始める）時に、なぜ〈趣味の遺伝〉論理解明とは関係の薄い「小説めいたこと」を記述したのであろうか。この矛盾点に、この一篇の「余」の執筆動機を再考すべき根拠がある。つまり、建前とは裏腹に「余」が過剰に語ってしまったことに、「余」がこの一篇を語る動機が隠されているのである。

では、「余」自身の言葉を覆すような物語とは具体的にいかなるものであるのか。例えばそれは、戦争の空想や、凱旋式の様子、寂光院での描写などに代表される点であり、まさにそれは「学者」のものではなく、「文士」のそれである。ではなぜ「余」は、こうした事を過剰に語るのであろうか。この一篇における前述の場面の意味を考えてみたい。

まずは冒頭における凱旋式の場面であるが、なぜ「余」はこの戦場の空想を、わざわざ物語の冒頭に据えたのであろ

うか。

冒頭における戦争の空想は、「恐い事だと例の通り空想に耽りながらいつしか新橋へ来た」とあるように、余の語っている「現在」から出たのではなく、まさに新橋に向かう途中になされているものである。言わばそれは、「書斎以外に如何なる出来事が起こるか知らんでもすむ天下の逸民」で「平生戦争の事は新聞で読まんでもない」「余」が「其状況は詩的に想像」してなされたものである。ここでの空想では「日人と露人」が同一視され、それが「犬」なるものに食い殺されるという残酷なものではあるが、非常に詩的――「余」自身も認めるとおり――で抽象的である。また、この空想ではこの戦争を特定するものが、「満州の果」や「朔北の野」あるいは「日人と露人」という言葉でしかない。この「陽気の所為で神も気違になる」と言う言葉から始まる残酷な戦争の空想は、これまで漱石の〈反戦・厭戦〉思想として捉えられ、論じられて来た。しかし、この空想は、「二」においてもう一度なされる空想と対比して考えねばならないのではないだろうか。

「新橋事件」を経てなされる二日目の戦争の空想では、まず戦場が十一月二十六日午後一時の松樹山攻撃のものであると、かなり具体的に特定される。そして「余」の視点が「浩さん」一人に定められることによって、「味方の打ち出した大砲が敵塁の左突角に中つて…」や「敵の弾丸は容赦なく落ちか、つて…」と言う風に、明確な敵味方の区別がなされるようになる。また「露人」に対する見方が、「浩さん」という特別な人物が前景化することによって、「早く平生の浩さんになつて一番露助を驚かしたらよからう」となる。このように、冒頭では敵味方無く超越的な視点を持っていた「余」が、「浩さん」に焦点を合わせることで、そうした超越的な視点を放棄することになる。このように二つの空想には、ある相違が見られる。それは簡潔に言えば「浩さん」という一人の人物に焦点化をすることである。また「一」の

冒頭になされた空想が「恐い事だと例の通り空想に耽りながら」とあるように、「余」がこれまで行ってきたであろう戦争の空想の典型であるとすれば、「二」においてなされた空想は、新橋での凱旋式を見た結果、「余」の意識に変化が起きてなされた新たな空想であるといえる。

三

では、次に凱旋式に遭遇した「余」の様子を確認しておこう。「余」が待ち合わす人に会うために新橋の停車場まで来ると、凱旋の軍隊を迎える人々の光景に出くわす。しかし「余」は凱旋式だと気がつかず、「何だろう?」と問うように、今日が凱旋式であることを知らなかった。知らないばかりではなく、「余」は「新橋停車場前の広場の一杯の人」が「左右に割り込む事も出来ない程行列して居る」という光景を見て、何の集まりか分からず、「木村六之助君の凱旋を祝す連雀町有志」と言う旗を見て、初めて凱旋式だと気がつくのである。新橋の凱旋式に気がつかない「余」とはどういった存在なのであろうか。

日露戦争が終わり、最初に世間を賑わした凱旋式は、海軍の東郷平八郎のものであった。そして東郷の海軍連合艦隊に続いて、十一月から陸軍の凱旋が陸続と始まる。当時の新聞記事には、「天皇陛下に於かせられてハ、出征軍総体に於ける旅団司令部以上の高等司令部を東京に凱旋せしめ、旅団長以上の職員並に少将以上の武官へハ特に新橋停車場より儀仗兵を附して宮城に参内せしめられ…」や「高等司令部の数ハ総司令部を合はせて、四十余、五十にも上るべく、これだけの多数が明年二月頃までに悉皆凱旋し来るものなれバ、東京市ハ明年二月までに、五十に近き陸軍高等指令部の大歓迎を行はざるべからず[7]」とあり、当時の新橋と凱旋式の関係がある程度理解できる。これを参照にするとこの時期、

新橋では凱旋式が頻繁に行われ、停車場前の広場はその歓迎に行く人で溢れており、旅団長及び少将以上は儀仗兵を従えて宮城への行進が行われていた。また『読売新聞』では「昨日の新橋」というシリーズ記事が続き、その度々の新橋での凱旋の様子を伝えており、凱旋式と新橋の強い結びつきが窺われる。[8]

「新橋」という場所が持つこうした意味を考えれば、駅頭の群集を見て、即座に凱旋式だと気がつくのが当然である。確かに「余」は戦争から距離のある人間であり、「余の様に図書館以外の空気をあまり吸った事のない人間は態々歓迎の為めに新橋迄くる折もあるまい」と語るものの、「余」は「平生戦争のことは新聞で読まんでもない」と語り、その新聞からの情報なのか、旅順の攻撃を事実に基づいて空想が出来るほど戦争については知っているのである。では、それでも気がつかない「余」の存在を一体どう捉えればいいのであろうか。大岡昇平はこのような凱旋の時期に、「何かと思ったら凱旋だったなんて、呑気なことを書くのは、相当の皮肉」としている。[9]あるいは、佐藤泰正は「今日は凱旋の将兵の帰還の日であるという国民周知の日時さえも念頭にないというこの〈うかつ〉さこそ、作者のたくらんだアリバイ作り」とし、「「余」の低徊的、迂回的饒舌をアリバイにして、皮肉にして痛烈な戦争批判を展開してみせる」と解釈する。[10]新橋の群集を一瞥して凱旋式だとわからない「余」は、確かにこの時点において「傍観者」であり、「太平の逸民」と言っていいだろう。そして、そうした人物造型自体が〈皮肉〉だとか〈国家批判〉の力を持ちえているのかもしれない。

だが、凱旋式に気が付かない「余」とは、そのまま戦場を「詩的」に想像する「余」である。そして「新橋事件」を契機に、その空想の中身に変化が起こり、「余」に「趣味の遺伝」と呼ばれる物語を経験させ、語らしめているのである。「余」は物語を書く動機となる「新橋事件」に遭遇する以前の「傍観者」としての「余」の姿を、この一篇の冒頭

にわざわざ配置している。そして、この「余」の姿は「新橋事件」以後、「余」によって暗に否定されていくのである。この点を考えれば、冒頭部の空想同様に、「余」の造形の意味は逆転するのではないだろうか。では、こうした契機となる「新橋事件」とは、いかなるものであったのだろうか。

四

「詩的」な戦争の空想をし、凱旋式に気づかない「余」が偶然新橋での凱旋式に遭遇し、「実は万歳を唱へた事は生まれてから今日に至る迄一度もない」が「帝国臣民」の「義務」として万歳を唱えようとする。しかし、「余」は万歳を唱えて凱旋を迎えようとしたが、「将軍の日に焦げた色が見えた。将軍の髯の胡麻塩なのが見えた」その一瞬間、万歳は止まってしまう。何故止まったのかは「余」はわからない。万歳は「余」の「支配権以外に超然として止ま」り、そして「万歳がとまると共に胸の中に名状しがたい波動がこみ上げて来て、両眼から二雫ばかり涙が落ちた」のである。

であるならば、「将軍」の姿に何かを感じたからに他ならない。それは「戦は人を殺すか左なくば人を老いしめるものである」と言うように、「将軍」の容貌（あるいはその変化）に、「戦争の結果」をみたのである。それは新聞などで戦争のことを知り、「いくら戦争が続いても戦争らしい感じがしない」と語る「余」が、今まで思いも至らなかったものなのである。この「将軍」の姿に「余」の万歳は止まり、「満州の大野を蔽ふ大戦争の光景があり〳〵と脳裏に描き出せれらた」のである。「余」は「将軍」を見て、初めて「大戦争の光景」を想像することが可能になったのである。その「大戦争の光景」の一片として、「余」が思い至ったのは「吶喊」である。「余」が「吶喊」に意義を見出したのは、「ワーと云ふ丈で万歳の様に意味も何もない」言葉をわざわざ出すのは「よくせきの事でなければならぬ」からであり、その生

死を賭けた場で出される声は「至誠の声」であるからである。この「至誠の声」を数万の兵が一度に唱えるのを聴いた時に「玄境に入る」のであり、これへの反応が「余」の涙である。この「玄境」を「余」は「将軍」の容貌を見た時に初めて想像し得た、と言うことである。この一瞬間の想像により、「余」の万歳は止まったのである。

五島慶一は、「将軍」に「戦争の結果」を見る「余」の視線を、戦争の最前線にいる一兵士と、そうした過酷な場に立たされない「将軍」の区別もできないとし、それは戦場に立つことのない大衆と同質の視線であるとしている。同様に戦場の空想にも大衆と変わらぬ視線を見、これらから「余」の戦争に対する想像力の欠如を見ている。[11] 確かに、「余」は戦争というものを「正確」に捉えてはいないのかもしれない。しかし、本稿において重要なのは、この「余」の視線にどれだけの戦争への想像力があるかということではない。重要なのは、「余」自身が戦争の現実に衝撃を受けていることであり、自分自身の戦争への視線に変化を起こしたことである。また、さらに言えば、戦争への想像が欠如していようが、「余」は凱旋を迎える群集と自らを差異化させようと記述している点が重要である。もちろん、この時、凱旋に沸く群衆に「余」が積極的な批判を持ちえていたとは思わない。ただし、こうした大衆の姿を相対化させる力は充分に持ちえているだろう。

例えば、同時代における戦争表象として、明治三十九年四月に刊行された桜井忠温の『肉弾』がある。その中で日露戦争に出征する兵士たちを描いた次のような箇所がある。

遠くまた近く響き渡る喇叭の声は、即ち至愛なる同朋に対する暇乞いであつた。老いたるも若きも、手に手に国旗を振翳しつつ、天地を轟かす万歳の叫びに対しては、我等は如何にもして此至誠に報いなければならぬと思ひ、

嘗て敵塁に向かつて、耳も聾する喊声を揚げて突撃した時には、背後で国民の万歳の声が、潮の如くに湧き起るやうに感じたのである。[12]（傍線引用者）

敵塁に「喊声」をあげて突撃する際に、その背後に「至誠」の「国民の万歳」の姿を見る、と言うこの文章は、『趣味の遺伝』の「然も此戦争の影とも見るべき一片の周囲を繞る者は万歳と云ふ歓呼の声である。此声が即ち満州の野に起つた吶喊の反響である」という語りと酷似している。しかし、両者には決定的な違いが有る。なぜなら、「余」が語るのは、「よくせきのこと」でなければ出せない「吶喊」の声を出して戦った者が凱旋し、この「万歳」を受けている、と言う現状であり、決して「万歳」と「吶喊」とを同列に見てはいない。「余」によれば、「万歳の意義は字の如く読んで万歳に過ぎんが吶喊となると大分趣が違ふ」のであり、「万歳の助けて呉れの殺すぞのとそんなけちな意味を有して」いない「至誠の声」なのである。決して『肉弾』のように「国民の万歳」に「至誠」を見てはいない。そしてなにより、「余」自身は「吶喊」の声を上げて帰って来たものに対して、万歳を唱えられなかったのである。

ともかく、「余」の語る物語の中で否定されるべきは、「将軍」の凱旋に際して「万歳の一つ位は義務にも申して行かう」と語り、大衆に接近して行こうと試みる「天下の逸民」たる「余」自身なのである。そして、冒頭の自分自身を否定した後に、「余」はどのような行動を取り、どのような物語を語っているのだろうか。

五

凱旋した「将軍」や凱旋兵に「戦争の結果」の一片を垣間見、「大戦争の光景」に思い至った「余」は、その後「浩

さん」似の軍曹とその母を見て、「昨日の新橋事件を思ひ出すと、どうも浩さんの事が気に掛つてならない」と「浩さん」のことに思い至る。「余」が「浩さん」に思いが至るのは、「亡友浩さんと兄弟と見違へる迄よく似て居る」軍曹を見てからであり、それまでは「浩さん」のことは忘れていた。しかし、忘れていた、と言うのは語弊がある。なぜなら「余」と「浩さん」とは「余は河上家の内情は相続人たる浩さんに劣らん位精しく知つて居る」という程の親密な中であり、「浩さん」の死後も何度も「御母さん」を訪ねている。そこでは「行く度に泣かれ」たり、「頻りに嫁々と繰り返し」たり、あるいは「浩さん」の日記を見てくれと頼まれたりと、今までの「余」の日常に「浩さん」は存在していたのである。つまり、思い至ったのは「浩さん」似の「軍曹」を見ただけではなく、「新橋事件」を経験したからである。そして、「新橋事件」によりある種の衝撃を受けた「余」は、今までは考えなかったあることに気づかされたのである。すなわちそれは、未だに「浩さん」が弔われていないと言う事実である。だからこそ「余」は「何等かの手段で親友を弔つてやらねばならん」と思い至るのである。しかし、「浩さん」が戦死したのは既に一年以上前であり、「紀念の遺髪は遥かの海を渡つて駒込の寂光院に埋葬された」のであり、今では「先祖代々の墓の中」に「祭り込まれている」。すなわち「浩さん」は社会的には充分に弔われているのである。さらには、旅順での戦死者には全員叙勲がなされているから、軍部としての弔いも既になされている。[13] 実際、「余」は初め新橋で凱旋式を見ても全く「浩さん」について思いが至らない。つまり、「浩さん」のことを思い出したから「弔つてやらねばならん」と思い至ったのではなく、それはまさに「新橋事件」を経験したからに他ならないであろう。

ここで「余」は、世間が戦勝を迎えても「浩さん」が弔われていないことを、「浩さんはまだ坑から上がつて来ない」と言うリフレインで表現する。とりわけ、「ステツセルは降つた。講和は成立した。将軍は凱旋した。兵隊も歓迎され

た。然し浩さんはまだ坑から上がつて来ない」などのように、戦勝、凱旋のような国民的熱狂に際しても、「坑から上がつて来ない」ことを強調する。戦死後一年余経ち、これまで「余」はそのような疑問を発しなかった。しかし、「新橋事件」を経て、世間の熱狂とは反対に、「余」は「浩さんはまだ坑から上がつてこない」という現実に気づいたのである。

それ故、この「二」以降の「余」の行動は、「浩さん」への弔いという意味を持っていると言える。それは「余」自身が「何等かの手段で親友を弔つてやらねばならん」と言うことからもわかる。

無論、従来の論でも『趣味の遺伝』に「鎮魂」を見る論は幾つかある。しかし、それらは厭戦的な「鎮魂」として見られることが多い。しかし、「鎮魂」とは、それが戦争への批判的な態度とは必ずしも結びつくものではないし、日露戦争後においてはむしろ――いや当然のように――「鎮魂」と言うことが厭戦とは反対のベクトルを持っていたのはいうまでも無い。それは軍部や各地で行われている招魂祭、慰霊祭などであり、その代表格が靖国神社におけるものである。特に日露戦争期間や戦後においては、「鎮魂」が排他的愛国心と結びつく言説が支配的であった。と同時に「鎮魂」はそのような支配的言説に結合しやすい言説空間でもあった。そのため『趣味の遺伝』という作品の中での「弔う」という行為が、単純に大文字の言説空間と共犯関係をなして行われ、語られるのかを確認しなければいけない。では、「余」が「浩さん」を「弔う」ことは、日露戦勝後において、いかなる意味があるのだろうか。それを探るために、まず「余」がいかに「浩さん」を弔おうとしているかを考えてみたい。「余」は行動としては墓参りで「弔う」ことにしようとするが、それ以前に「余」は「浩さん」の弔いとして次のようなことも考えている。

何等かの手段で親友を弔つてやらねばならん。悼亡の句抔は出来る柄ではない。文才があれば平生の交際を其儘

記述して雑誌にでも投書するが此筆では夫も駄目と。

「浩さん」の弔いの一つとして「余」は、「平生の交際」を「雑誌に投書する」ことを考えている。しかし、「余」のその望みは「文才があれば」の話であり、「学者」である「余」には、純粋な「文士」的仕事は出来ないのである。それゆえ、墓参りという手段を思いつく。だが、そんな折に「余」が遭遇したのが、「寂光院事件」であり、それを〈趣味の遺伝〉の論理で解明した、と言うまさに「学者」としての手柄であった。「余」はこれを利用しない手はない、と考えたであろう。「余」は〈趣味の遺伝〉の論理を解明したことにかこつけて、「浩さん」の弔いのための文章を書こうと考えた（かこつけているのは「小説めいた事」を「長々しくかいて」いる事実からもわかる）。「余」がこれを「読者」に向けて語るならば、「読者」の目に触れるような、なんらかの媒体に掲載される必要がある。そのために、必要なことが〈趣味の遺伝〉の論理解明という体裁であった。こうした二面性が、あくまで「余」が「学者」的に振舞おうとしながらも、この物語を「文士」の「小説めいたもの」にしているのである。

六

では、「余」はこの時期に、一体何を語れば「浩さん」を弔うことになると考えたのだろうか。まずは、『趣味の遺伝』の作中時間が、「浩さん」の死後「一年余」ということから、明治三十八年末から三十九年初という時期であることがわかる。では、これがどういう時期かを確認しておこう。

明治三十九年元日の新聞記事が、「今日は平和の元日なり、又凱旋中の元日なり」と言う言葉で始まるように、明治

三十九年は凱旋が本格的に行われた年であり、前述したように世の中は凱旋に沸いていた。とりわけ「浩さん」が属していた第三軍の凱旋報道は大々的になされていた。乃木大将率いる第三軍の凱旋間近の新聞記事には、「露国が難攻不落と称したる旅順の堅城を包囲し幾十回の悪戦苦闘を為し之を攻略して世界戦史空前の驍名を轟かし（中略）国民は此名誉ある将軍の勲功を崇敬するの念愈切なれば明日の歓迎は一層盛大なるべし」と語られている。[14] そして乃木の凱旋を伝える「乃木大将凱旋」には、「旅順要塞の攻陥に戦史に其比を見ざる壮烈悲惨の攻城戦を為して見事効を奏し（中略）第一師団は乃木将軍の統率の元にありし事とて昨日の凱旋に對する東京市民の歓迎は何に譬へん様になき盛大を極めたり（中略）其の混雑到底筆紙に盡くす能はず大山、東郷両大将凱旋の盛況も昨日には及ばずと見えたり」とある。

こうした凱旋記事から、乃木と第三軍の凱旋がこれまでで最も盛大であったことが分かる。当の「浩さん」も彼らと同じように、この戦場で戦った兵士なのであるが、「蟻群の一匹の如く」に、「蜘蛛の子の如く」に戦い、旗を振って、塹壕に飛び込み死んでいった。それ故、「ステツセルが開城して二十の砲砦が悉く日本の手に帰しても」「日露の講和が成就して乃木将軍が目出度凱旋しても」「浩さんは依然として坑から上がつて来ない」のである。しかし、世間はそうしたことは忘れて、帰って来た凱旋兵の歓迎に熱狂している。まさにそれは「誰も浩さんを迎えに出たものはいない。天下に浩さんの事を思つているのは此御母さんと此御嬢さん計りであらう」と「余」が末尾で語る通りなのである。「余」にとって見れば、「偉大な男」であり、また歓迎を受ける資格のある「浩さん」が、こうして世間から忘れ去られ、「坑から上がつて来ない」現状に直面し、「浩さん」を弔う必要があると再認識するのである。そして、「余」は〈趣味の遺伝〉の論理を語りながらも、「偉大な男」である「浩さん」が弔われていないことを示し、また「平生の交際」を記し、戦地での日記を公開するなど、「読者」（世間）に対して、「浩さん」のことを語り始める。それは「余」なりの〈戦死者

報道〉とも言えるだろう。

それを示すものとして「名前」の問題がある。実は、この物語の中で名前が明かされるのは死者だけであって、唯一例外は「小野田博士」であるが、それは「小野田」という先祖の話があるので、その流れで明かさざるを得ない。しかし、「余」の名前も結局語られないし、「御母さん」や「寂光院の女」の名前も最後まで明かされない。学校の同僚の名は老人により「何の友達で」とぼかされ、老人の名はなぜか「わざと云はない」のである。そしてもう一人、「余」は同時代において最も有名であるはずの人物のうちの一人の名前も明かそうとしない。すなわち「帝国の運命を決する活動力の断片」である「英明赫々たる偉人」の「将軍」である。こうした記述がなされるのは、この物語が戦勝の熱狂から忘れられた「浩さん」の〈戦死者報道〉であるからである。まさに〈無名〉の死者を〈有名〉にしなければならないからである。「浩さん」にだけ「名が有る」のはそのためである。

しかし、「余」は新聞紙上を中心になされていた〈戦死者報道〉を再生産するつもりはない。なぜなら、それでは「浩さん」を単なる「戦死者」（あるいは「旅順攻囲戦　戦死者」）としての記号的意味しか持たせることが出来ないからである。また、「余」は「浩さん」の日記を見て、「ことに俗人の使用する壮士的口吻がないのが嬉しい。怒気天を衝くだの、暴慢なる露人だの、醜虜の胆を寒からしむだの、凡てえらそうで安つぽい辞句はどこにも使つてない。文体は甚だ気に入つた」と感心していることからもそれは窺えるだろう。[15] それ以上に、「万歳」を唱えられないと言う、新橋での群集の熱狂を相対化させる「余」の記述そのものが、「万歳」に溢れる世上の〈戦死者報道〉と異なることは言うまでもないだろう。さらに、歩兵中尉である「浩さん」について、すでに新聞紙上で〈戦死者報道〉がなされていた可能性もある。例えば、「二」において「余」が浩さんの戦場での様子を空想するときに、その戦争の情報（「風が強い」とか

「時刻は一時か一時半頃である」など）は一般的な情報であるが、「浩さん」が「冷たくなつて死んで居たさうだ」などは伝聞の情報である。また「余」は「浩さん」の日記を見る前から、「浩さん」が旗持ちで、旗を振って戦死したことを知っている。しかし、仮にそうした「浩さん」の〈戦死者報道〉があったとしても、「余」は満足できなかったはずである。いや、凱旋式に遭遇する前の「余」ならば、それで納得し、「浩さん」も弔われたと考えたことであろう。しかし、凱旋式で「新橋事件」という衝撃を受けた「余」にとっては、「安つぽい辞句」を並べて伝えられ、国家の物語の中で戦死者（とその遺族）を表象し回収していく〈戦死者報道〉では納得がいかないのである。

七

〈戦死者報道〉の側面を持つこの一篇の中で、戦死者の問題とあわせて語られるのが遺族の問題である。前掲五島論文では「余」は「御母さん」の「慰問者」として役立っていないとされている。確かに「余」の興味は〈趣味の遺伝〉論理（神田論で言えば、「浩さん」と女の関係）にあるが、それは前述したように、建前とは言え、この一篇の「骨子」があくまで「学者」による〈趣味の遺伝〉の論理解明にあるからである。この遺族救済の問題は「余」が実際に「御母さん」に何をなしたかで考えるべきである。

まず、「新橋事件」の翌日、「余」は「浩さん」の戦場での様子を空想し、「浩さんは何故壕から上がつて来んのだろうか」と考えるのだが、その考えの行き着く先は、「可哀そうなのは坑を出て来ない浩さんよりも、浮世の風にあたつて居る御母さんだ」とあるように、戦死者遺族としての「御母さん」に悲しみを見出す。無論、この種の言説を成立させているのは、戦死者約八万四千人と言われる被害を出した日露戦争中の同時代状況に他ならない。日露戦争終結ととも

に、遺族をいかに慰藉するのかが問題となり、国家的なものから各組織によるものまで、様々な遺族への対応が実施される。そうした状況の中で、遺族がいかに国家に「救済」されていくのかと言う物語が必要となってくる。当時の新聞記事には凱旋途中の乃木希典が旅順攻略戦で戦死した歩兵中尉の母――まさに「御母さん」そのものである――をわざわざ慰め、母が「大将の厚意に感泣して立ち去りたり」と言うような記事も見える。[16]

では、「新橋事件」を経験した後に、「余」はいかに軍人遺族である「御母さん」を「救済」しようとするのであろうか。そもそも、その「御母さん」が「浩さん」の戦死後、しばしば口にする愚痴は「せがれに娵でも貰つて置いたら、こんな時には無心丈夫だろうと思ひます」や「そら娵が出た。くる度によめが出ない事はない」などとあるように、「娵」であった。以前にも「せめて気立ての優しい嫁でも居りましたら、こんな時には力になりますのに」と「頻りに嫁々と繰り返して」いたのである。「御母さん」は「浩さん」の日記から「郵便局で逢つた女」を「浩さん」が生前「好いていた」のではないかと推測し、その真偽確認を「余」に依頼する。こうした「御母」さんの頼みに対して、「余」は日記を借りる。確かに、「余」にとってその目的は、「寂光院の女」が一体誰なのか、と言うことの手がかりとしてであり、「余」の語りを額面どおりに信じるならば、〈趣味の遺伝〉の論理さえ証明できればいいのである。しかし、「余」はそこで仕事――あるいは語り――を終えるのではなく、「御母さんは女丈に底の底まで知りたいのである」ことを理由に、「とゞのつまり事情を逐一打ち明けて御母さんに相談した」のである。そして「御母さん」の智慧によって、「余」は二人を会見させることに尽力する。そして結末は「御母さんと御嬢さんとは時々会見する。会見する度に仲がよくなる。一所に散歩する、御饌をたべる、丸で御嫁さんの様になつた」のである。すなわち遺族となった時の「御母さん」の念願であった「こんな婆さんを態々連れてあるいて呉れるもの」を、また、まるで「気立ての優しい嫁」のような存在を

手に入れたのである。この点からしても「余」は「御母さん」の慰藉に成功していると言える。

結

「余」によるこの一篇の物語は、〈趣味の遺伝〉の論理解明の発表と並行し、「御母さん」の慰藉という内容を含めながら、「浩さん」の弔いをなしている。「新橋事件」以後、「余」は「浩さんはまだ坑から上がつてこない」事に気づき、弔いが必要だと考え、この一篇を語り始めた。確かに、末尾においても「余」は「浩さんは塹壕へ飛び込んだぎり上がつて来ない」と再び繰り返す。しかし、これはその後の「天下に浩さんの事を思つているものは此御母さんと此御嬢さんばかりであろう」という言葉と併せて考えるべきであろう。なぜなら、「余」はこの一篇を「読者」に発表し得たのである。とすれば、「天下に浩さんの事を思つているもの」は、すでに「此御母さんと此御嬢さんばかり」ではない。すなわち、「余」は「浩さん」の弔いを、この一篇を発表することで成し得たのである。

では、この一篇を日露の戦勝後の言説空間に布置したとき、どのような批判性をもちえるのだろうか。戦死者の弔いや遺族の慰藉という問題は、日露戦争後の同時代の大文字の言説とつながるものであった。その点で、「余」の物語はその範疇から出るものではない。しかし、決してそれらと共犯関係になされたものではない。これまで見たように、「天下の逸民」であり、安易に大衆に接近しようとする自己を、「余」は否定していく。また同時代の支配的言説、新聞紙上に溢れる〈国家の物語〉、そうした中で、「軍人＝浩さん」、「戦死者＝浩さん」、「銃後の人々＝余」に与えられた役回りを、彼らに容易に演じさせなかったと言う点では、「余」の語る一篇は、当時の支配的言説を相対化する力を持ちえていた。こうした「余」の姿は、『吾輩は猫である』における苦沙弥が、「一大凱旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉せんが為

め」の義捐金募集の勧誘状を冷淡に読み捨てる姿と一見相反しているようで、通じているものがある。[17] それは「趣味の遺伝」を超えて、「漱石」という〈国民作家〉と戦争、国家という問題、あるいはそれを解釈し続ける研究場の問題であり、今後問い直されるべき――「清算」すべき――問題領域である。

註

(1) 駒尺喜美「漱石における厭戦文学」『日本文学』1972・6

(2) 丸谷才一「徴兵忌避者としての夏目漱石」(『展望』筑摩書房1969・6) 及び駒尺喜美「丸谷さんへの手紙」(『展望』筑摩書房1969・8) を指す。

(3) 『趣味の遺伝』に厭戦・反戦思想を読み取る研究史については、論者修士論文(慶應義塾大学院2007) において考察した。そもそも前掲駒尺論文は、大岡昇平の芸術院会員辞退を契機になされたものであり、ここでの「趣味の遺伝」解釈では、戦中に捕虜となった大岡が、身代わりに戦死した兵士への鎮魂のため、戦後に軍部批判を行う姿と、丸谷との応答で生まれた徴兵忌避をした漱石の姿、そして、親友が戦死したが自らは戦場に行かなかった「余」の姿が暗に重ねあわされている。

(4) 佐藤泉「「こころ」の時代の特異な正典」『國文学』 學燈社2006・3

(5) 宮薗美佳「夏目漱石『趣味の遺伝』小論」『日本文藝研究』 日本文学会 1997・6

(6) 神田祥子「趣味は遺伝するのか」『日本近代文学』 日本近代文学会 2007・5

(7) 『読売新聞』 明治三十八年十月三十一日

(8) 東郷大将の凱旋時期など、早い時期の凱旋に、このシリーズを見ることが出来る。一例では、明治三十八年十月二十三日の『読売新聞』において、「昨日の新橋」というものがあり、東郷大将の凱旋の模様や群集の様子が伝えられている。

(9) 大岡昇平「漱石と国家意識」『世界』 岩波書店 1973・1

(10) 佐藤泰正「戦争文学としての『趣味の遺伝』」『戦争と文学』 笠間書院 2001・11

(11) 五島慶一「表現・構造から考える「趣味の遺伝」」『三田国文』 2008・12
(12) 櫻井忠温『肉弾』 明元社 2004・6
(13) 『読売新聞』 明治三十八年十月八日
(14) 『東京朝日新聞』 明治三十九年 一月十三日
(15) 「余」のこうした「壮士的口吻」や「安つぽい辞句」への批判は、『吾輩は猫である』における苦沙弥の「大和魂」の詩や広瀬中佐の詩を批判したのと通ずるところがある。そのとき批判されるのは、広瀬ではなくその文章であり、また大和魂ではなく、その流行なのではないだろうか。
(16) 『東京朝日新聞』 明治三十九年一月十七日
(17) 駒尺喜美は「丸谷さんへの手紙」(『展望』筑摩書房1969・8) の中で、この苦沙弥の姿に、戦争批判を読取っている。